## アジ歴10年の成果と今後の課題

アジア歴史資料センター長

平野健一郎 ひらの・けんいちろう

国立公文書館アジア歴史資料センター(「アジ歴」)は、今秋、設立10周年を迎える。すなわち、アジ歴は、平成6年8月に、当時の村山首相が「平和友好交流計画」の中で設立を提唱したことに始まり、有識者会議での検討の後、平成11年11月30日の閣議でその設立が決定され、2年の準備期間を経て、平成13年11月30日に正式に発足したものである。アジ歴の組織は国立公文書館の中に置かれることになり、国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所図書館(現 防衛研究所戦史研究センター)などが所蔵する日本・アジア関係の歴史公文書資料をデジタル化して、広く国内外に公開する事業を開始した。

こうして、アジ歴は、近代日本のアジア歴史資料を「いつでも、どこでも、誰もが、無料で」利用できる状態をはじめて生み出し、21世紀最初の10年を閲してきたのである。毎年、上記3館から電子化された歴史公文書の提供を受け、目録を整備し、キーワード検索が可能になるようにテキストの整備と辞書の作成・改善を重ねてきた結果、初年度には225万画像の公開でスタートしたものが、10年目の本年度末には、約2,500万画像を公開するに至っている。

## 1. 10 年間の環境変化

この10年間、アジ歴は順調にアジア歴史資料の公開を重ねてきたが、アジ歴を取り巻く環境は大きく変化した。最大の変化はデジタル化の急速な進展である。加えて、まさに本年度から施行されている公文書管理法が、アジ歴を囲む環境を大きく変化させている。さらに、アジ歴自体が成長を重ねた結果、それを取り巻く環境に影響を与える

存在になっている。

(1)デジタル化の進展 コンピューターの発達によ るデータのデジタル化の趨勢は誰の目にも瞭ら かであるが、特に、アジ歴にとって最初の10年 である最近10年間におけるデジタル化の勢いは 猛烈であった。設立当初、アジ歴が文書をデジ タル化して提供し始めたときには、「データベー ス」や「デジタル・アーカイブ」ということばは、 多くの人にはまだ耳慣れないことばであった。そ れが今や、「データベース」は日常語に近いもの になり、多くの図書館、資料館、博物館などが「デ ジタル・アーカイブ」の併設を目指すようになっ ている。日本では、行政文書の逸失、災害によ る紙媒体文書の破損などによっても、「データ ベース」、「デジタル・アーカイブ」への関心が 強まることになっている。なによりも、事務処 理と広報と、そして研究にとって、デジタル化 されたデータの利便性は甚大で、一度その効用 を知れば、誰も二度とその使用をやめることは できないであろう。

アジ歴の設立に当たっては、複数の省庁の文書を一箇所に集中して、広く国際的にも利用に供する必要から、当時まだ試用段階であったデジタル化を思い切って採用したのであった。予算の制約からもその方式が選択された。これが、政府公文書の整理・公開をデジタル化によって行うテスト・ケースにアジ歴が選ばれるという結果になった。当初は、唯一無二であるはずの公文書をデジタルで複写することに対する不信感も根強かった。その不信感はアジ歴そのものに対する不信感でもあった。それが今や、デジタル化の流れによって、アジ歴は「デジタル・アー

カイブ」の最先端に押し出されているのである。

(2)公文書管理法の施行 今年度始まった公文書管 理法の施行は、二つの方向からアジ歴に直接的 な影響を与え始めている。一つは、同法の基本 的枠組によって、すべての中央省庁(ただし、下 記の二つを除く)の歴史公文書が国立公文書館 に集中されることになったことである。今後は、 それらの公文書のうち、国立公文書館が「アジ ア歴史資料」と指定する文書は、アジ歴を通し てデジタル公開されることになる。過去10年間、 アジ歴が公開できる資料は国立公文書館、外務 省外交史料館、防衛省防衛研究所図書館の3館 から提供されるデータに限られるのが現実で あった。また、対象期間もおおむね第二次世界 大戦終了時までとされてきた。それが、国立公 文書館により広く、より厚く公文書が移管され ることによって、対象期間も延伸される可能性 が出てこよう。国内外の利用者からも強く要望 されてきたアジ歴データベースの範囲拡大が、公 文書管理法の施行によって実現することになる のは、まことに喜ばしいことである。

他方、公文書管理法にもとづき、外務省外交史 料館と宮内庁書陵部が「国立公文書館等」に指 定されたことから、2機関はそれぞれに歴史公 文書の保存を行うことになり、アジ歴がこれら 2機関から国立公文書館を通じて「アジア歴史 資料」の提供を受けることはないかもしれない。 今後は、デジタル化の隆盛と公文書管理法の施 行という環境の下、アジ歴とこれら2機関の間 に新しい協力関係が生まれることを望みたい。新 しい関係を構築する気運は生まれつつある。

(3)アジ歴の成長 この10年間、アジ歴は与えられた任務を粛々と遂行してきた。任務遂行のために行ったさまざまな工夫については、次節で簡単に触れることにして、アジ歴を全体の流れに位置づけてみれば、まず、アジ歴は村山内閣時代に始められた「平和友好交流計画」のなかでもっとも成功したと評価されていることを挙げたい。いいかえれば、日本とアジア近隣諸国との間における歴史認識問題の改善に、アジ歴は

一定の役割を果たしてきたと考えられる。もちろん、政治外交面でのアジ歴の効果を明示するのは難しいが、アジ歴が存在しなかったら、この10年はどうであっただろうか。少なくとも研究面では、アジア諸国の歴史研究者の間にアジ歴はなくてはならないものとして定着し、肯定的な評価を与えられるようになっている。要すれば、アジ歴は日本国民・政府の国際公約であり、さらには国際公共財になっているのである。

自らも創りだしたこのような環境のなかで、アジ歴の役割は当初の目的を超えるものになっているかもしれない。現状に満足することなく、アジ歴の存在意義をさらに発揮するために、新しい工夫を重ね、アジアにおける平和と友好のために貢献を続けていきたい。本年11月、東京におけるEASTICA総会の機会をお借りして開催するアジ歴10周年記念国際シンポジウムで、皆様の評価とご意見をいただき、今後5年、10年の活動計画に活かしていきたいと考えている。

## 2. アジ歴が達成したこと

アジ歴の今後の計画を構想するためにも、最初の10年間でアジ歴が達成したこと、達成できなかったことを確認しておく必要がある。アジ歴の設立を決定した平成11年11月の閣議決定は、「国立公文書館、外務省外交史料館、防衛庁防衛研究所図書館等の国の機関が保管するアジア歴史資料を電子情報の形で蓄積するデータベースを構築し、インターネット等を通じて情報提供を行うこと」をアジ歴の任務と定めた。アジア歴史資料のデータベースの構築がアジ歴の使命である。

(1)データベースの構築 上記3館から提供される 文書資料のデータベース化は、量的には10年間 の当初目標をほぼ達成する見通しである。アジ 歴が当初から独自に行ってきた、すべての文書 の「先頭300字」のテキスト化とそれを活用す る辞書作成が、検索機能を大幅に強め、文書間、 3館間の横断検索を容易にして、データベースの 利便性を極限まで高めている。実際、アジ歴デー タベースは現在までのところ歴史資料データ ベースの最高峰と評価され、世界標準とみなされている。

しかし、アジ歴データベースの対象範囲はこれまでのところ、上記3館から提供される資料に限られており、対象の機関と期間を拡大するというユーザーの、したがってアジ歴の要望は達成されていない。加えて、海外からしばしば発せられる「すべての公文書を公開しているか」という問いに限定的にしか答えられないという制約もある。

(2)ユーザーの拡大 アジ歴のデータベースは国内 と国外の両方で活用されなければ意味がない。そこで、アジ歴のホームページは日本語のほか、中 国語、韓国語、英語でも提供している。ただし、データベース本体は原データの画像であるから、大半が日本語のままであり、英語、中国語、韓 国語には、「先頭 300 文字」やキーワードの翻訳、辞書機能を与えていない。

この間に、アジ歴のユーザーが大きく専門ユーザー(研究者)と一般ユーザーに分かれることが明確になった。国内、国外の相当数の歴史研究者が恒常的にアジ歴を利用し、いわば「固定客」になっていることは、アクセス数のデータ、モニター・アンケート、研究者間のコミュニケーションなどから明らかである。この10年間に専門研究者がアジ歴データベースを活用してどのような研究成果を挙げてきたか、アジ歴が行なってきた日中韓英語の文献調査がこのほどほぼ完了したので、その結果を今年度中に発表したいと考えている。

一般ユーザーとは、歴史に関心を持つ人、特定のテーマに興味を持つ人がアジ歴データベースにアクセスするというタイプである。アジア近隣諸国との相互理解を促進することがアジ歴の目的であり、なによりもアジ歴が国民の財産であることに鑑みて、一般ユーザーの利用を増進することに力を注いできた。その努力の主なものは、インターネット特別展(日露戦争特別展I、公文書に見る岩倉使節団、公文書に見る日米交渉、『写真週報』にみる昭和の世相、条約と御署

名原本に見る近代日本史、日露戦争特別展Ⅱ)、特集(終戦に関するアジア歴史資料センター公開資料のご紹介、震災と復興)、アジ歴トピックス、アジ歴スペシャル・コーナーなどで、これらがトップページを彩って、人々の関心を惹きつけてきた。特集「震災と復興」を今年6月に公開するなど、タイムリーな展示を行なう工夫をして、効果を挙げてきた。

高校生、大学生が将来、アジ歴の一般ユーザーあるいは専門ユーザーに育つことが望ましい。インターネット特別展などは若い人々にも見てもらいたいものであるが、アジ歴の職員が各地の学校などに出張して、アジ歴に親しむきっかけを提供する努力も重ねている。「社会科授業用資料リスト」は、全国歴史教育研究協議会などに集まる高校教員からの示唆によって作成し、提供しているものである。

- (3)認知度の向上 ユーザーの数を増やすには、その前にアジ歴の存在を知ってもらわなければならない。残念ながら、アジ歴というユニークで貴重な歴史資料の宝庫があることは、まだあまり知られていない。上記のように、トップページのコンテンツを魅力あるものにしようとしてきたのは、認知度を向上させるためでもある。今年から「アジ歴サポーター」のコーナーも設け、また、ホームページを一新した。しかし、一般ユーザーのレベルでアジ歴の認知度を高めるには、なおさまざまな工夫が必要であると認識している。
- (4)デジタル・アーカイブ化の方向 21世紀最初の 10年間にアジ歴が事業を展開してきて、間違っていない方向を辿ってきたとすれば、それはデジタル・アーカイブ化の方向である。この 10年間の環境変化として上に述べたように、その方向はアジ歴のスタートそのものに由来し、10年間の急激なデジタル化という趨勢に励まされたものであったかもしれない。しかし、それは、誰よりもアジ歴のユーザー達が望んできたものである。インターネットを通じて、どこからでも、いながらにして貴重な資料を、それも横断的に見られるからこそ、アジ歴のデータベースを利

用するのである。その意味では、デジタル・アーカイブ化はアジ歴がその存在と活動によって牽引してきた方向であるといってもよい。ユーザーのアジ歴に対する評価が肯定的なものに変化したのは、データベースの規模がある閾値を越え、包括的であると認められるようになった時点である。今では、「アジ歴のようなデータベースが欲しい」という利用者の声が、国内・国外の各処にデジタル・アーカイブの設置をもたらしているのである。

多くのデジタル・アーカイブが生まれれば、それらの間にリンクが張られ、デジタル・アーカイブのネットワークが生まれるのは瞬時といってもよい。しかし、アジ歴はまだその壁を突破していない。アジ歴ホームページ上には「国内所在資料調査報告書」のアイコンがあり、開ければ、充実した文書資料館のリストと案内が現れる。しかし、それらにつなぐ方便は提供されておらず、リストは垂涎の画餅にとどまっている。国際的にも同じ状況である。

## 3. 今後の任務と課題

アジ歴の今後5年、10年の任務と課題は、過去10年に達成したことと仕残していることとにすでに明らかであるが、それらを、利用の拡大、利便性の拡充、信頼性の充実の3点にまとめて、長期的な結論としたい。

(1)利用の拡大 アジ歴「利用の拡大」を腑分けすれば、海外における利用の拡大、研究者による利用の拡大、一般利用者による利用の拡大、教育面での利用の拡大、行政官による利用の拡大が挙げられる。一般利用者による利用の拡大と教育面での利用の拡大のための工夫についてはすでに述べたので、繰り返さない。海外における利用の拡大は、アジ歴のデータの性質上、研究者による利用の拡大にほぼ等しい。国内も含めて、研究者の利用が増えるのは、データベースが充実し、横断検索の範囲が広がったときであろう。研究者のデジタル・データへのアレルギーは弱まっ

てきているので、次に述べる利便性の拡充にしたがって利用がさらに拡大することは間違いない。

今後、データベースの新たな利用者として期待されるのは、行政官と国民一人一人である。これまで、日本の行政官は執務のために歴史公文書を参照することがほとんどなかったように見受けられる。しかし、これからは、利用しやすいデータベースを駆使して、歴史性の深みのある行政を進めて行く行政官が増えるであろう。国民は、一人一人、たとえば「ルーツ探し」にデータベース化された公文書を使いこなすことなどが期待される。アジ歴のようなデータベースは、まさに国民一人一人に利用されてこそ真骨頂を発揮するのではなかろうか。

- (2)利便性の拡充 今後のアジ歴の「利便性の拡充」は、デジタル・アーカイブ化の一言につきる。アジ歴が先鞭をつけた複数機関の所蔵資料間の横断検索の可能性をさらに広げ、さらに国際的なデジタル・アーカイブ・ネットワークを実現することがすべての利用者の利便性を格段に増やすことになるに違いない。
- (3)信頼性の充実 アジ歴のデータベースの信頼性を担保するのは、直接的には、現在3館から提供されている戦前文書がそのすべてであるという証明である。しかし、不在文書の存否を証明するのはきわめて難しい。その困難をなんとか乗り越えるのは、すべての公文書機関の歴史公文書を迅速に公開し、かつそれらをすべてデジタル化してまとめて提供する誠実さ以外にない。そうすることは、国民一人一人を含むすべての利用者にとっての「利便性の拡充」でもある。

現在、アジ歴は小さいながらも、日本の「アジア歴史資料」とされる公文書のデジタル・アーカイブであり、デジタル・アーカイブとして国際的にも最先端にある。データベースの蓄積量は大きく、データベース作成の経験と能力も備えている。これからもアジア歴史資料データベースとしての全体性、包括性を維持して、信頼性を充実させたい。原資料を保管する各機関がそ

れらの保管と公開を迅速かつ的確に行うと同時 に、「アジア歴史資料」のデータベースを一元的 にアジ歴から提供するようにすれば、先進民主 主義国としての日本の信頼性は大きく増すことになるであろう。